

掲示板

各種研修会等への講師派遣

北海道地域農業研究所では、各種研修会・研究会への講師派遣など次のとおり対応している。
(平成五年二月～四月)

○美瑛町農協冬期懇談会・講演

主催 美瑛町農協
とき 平成五年二月三日
テーマ 農業における情報システム
の役割
講演者 中村正士 (当研究所
・専任研究員)

○北檜山町農民塾・分担講義

主催 北檜山町
とき 平成五年二月四日

テーマ 北海道野菜の位置づけ
と今後の展望

講演者 富田義昭 (当研究所
・常務理事)

○七飯町農事実行組合長研修会

主催 七飯町・七飯町農協
とき 平成五年二月四日
テーマ 農事組合の再編について

講演者 柳村俊介 (酪農学園
大学・助教)

○上富良野町農業講座

主催 上富良野町・上富良野町
農協
とき 平成五年二月十五日
テーマ 北海道野菜の位置づけ
と今後の展望

講演者 富田義昭 (当研究所
・常務理事)

○第23回通常総会・特別講演

主催 胆振酪農専門農協
とき 平成五年二月二十四日
テーマ 消費者が見る「農業」
講演者 田端弘子 (コープさ
つろ生活文化研究所)

所長)

○美瑛市農業フォーラム93・基調講演

主催 美瑛市
とき 平成五年三月四日
テーマ 「食と農」に関する再
認識をめくって
講演者 富田義昭 (当研究所
・常務理事)

○白糠町酪農研修会

主催 白糠町農業振興推進会議
とき 平成五年三月八日
テーマ ゆとりのある農家生活
の実現
講演者 三友盛行・三友由美子
(中標津町・酪農家)

○北海道農業ガイダンス

主催 (株) 組合貿易
とき 平成五年三月九日
テーマ 野菜・果実の生産と流
通について
説明者 富田義昭 (当研究所
・常務理事)

○第85回北海道農業経済学会例会

主催 北海道農業経済学会
とき 平成五年三月十八日

個別報告 酪農における個体乳
量増大による経営変
化 ―急速に高泌乳
化した釧路支庁・白
糠町を対象に―
報告者 吉野宣彦 (当研究所
・専任研究員)

○93上磯農業サミット

主催 上磯町農協・上磯町
とき 平成五年三月十九日
基調講演 明日のかみいそ農業
をどう展開するか
意見交換会 新たなかみいそ農
業の発展をめざし
て

講演及び助言者 富田義昭 (当
研究所・常務
理事)

○厚沢部町農政協議会・研修会

主催 厚沢部町農政協議会
とき 平成五年三月二十三日
テーマ 東北農業に学ぶ
講演者 神田健策 (弘前大学
・教授)

○農協青年部酪農部会・研修会

主催 十勝地区農協青年部・酪農部会

農部会

とき 平成五年四月十五日

テーマ 縮小も可能性のある選

扱肢―酪農経営の単一

思考からの脱却―

講演者 吉野宣彦 (当研究所
・専任研究員)

「農業・食糧フォーラム」
への後援と資料の紹介

(社)日本中小企業技術振興協会北海道支部主催による「農業・食糧フォーラム」が、去る三月十二日札幌総合卸センター共同会館で開催され、多様な業種・機関の方々一八〇人が参加した。当研究所ではこの催しに後援し、会員に参加を呼びかけたところ多数の会員が出席された。

その内容は、農産物国際化の具体的なプロセス 限界と問題点 ―北海道農業への提言を含めて―と題し①「国際動向と世界の食糧事情」―先進国の役割―北海道大学農学部教授・黒柳俊雄氏、②「開放経済体制下での食糧安全保障」―新農政プランの評価―京都大学農学部助教授・嘉田良平氏、③「食

糧備蓄対策の技術的考察」―冷熱エネルギーの利用―北海道大学工学部教授 佐伯浩氏による講演であり、いづれも興味深くしかも有意義な話題であった。

カットウルグアイ・ラウンドの帰趨が注目される昨今、将来的に世界的規模での食糧逼迫が憂慮される視点の話題を中心に、新農政プランの話題など、農業・食糧問題に参加者の関心が寄せられた。しかも、日本の農業に対する国民的合意が必要とされる時期に、このような農業以外の業種の方々が多数参加した催しは、日本の食糧基地を標榜する北海道農業にとつて、誠に時宜を得た企画であり関係者に感謝したい。

なお、主催者の(社)日本中小企業技術振興協会北海道支部は、かねて農業部門研究会を設けて独自の研究活動を続けながら、機関誌「農研」を発行するなど農業問題に深い関心を寄せる異業種交流集団としてユニークな活動をしている。その一環として

今年一月、資料集「国際機関における農業活動と食糧問題」―国際社会の理解と認識のために―(B5版・二百ページ、一、六〇〇円)を刊行しており、この機会に紹介したい。

今回の「農業・食糧フォーラム」の内容については「農研」に掲載される予定。その他刊行物の講読希望者は、同協会北海道支部(電話011・821・1643)に照会されたい。



「農業・食糧フォーラム」の会場風景

図書「農産物市場問題の 現段階」の発刊案内

当研究所の千葉燎郎所長（副理事長）著の「農産物市場問題の現段階」が、このほど出版された。

著者は農林省農業総合研究所で三十二年、北海学園大学に十年在職し、現在当研究所所長の任にあり、この間、農業問題の研究に従事している。

多年の研究業績に対し北海学園大学経済学部、日本ユーラシア協会道連事務局、当研究所関係者が中心になり、「千葉燎郎先生著書刊行事業会」を組織し、これまでの研究論文について、著者が集大成したものについて、出版するための支援を行った。

著書の内容は、第一部 農産物市場への接近、①農産物市場問題の現段階 付論・農産物市場論の課題―報告と討論―、②現代農業構造分析の市場論的視角、③我が国農産物市場をめぐる基本矛盾―輸入「自由化」攻勢下の北海道農民を中心に―。

第二部 農産物市場構造の分析

①我が国における牛乳・乳製品過剩問題の特質、②農産物市場における生鮮食料品の流通について―その現状と問題―。

第三部 農産物市場政策の展開

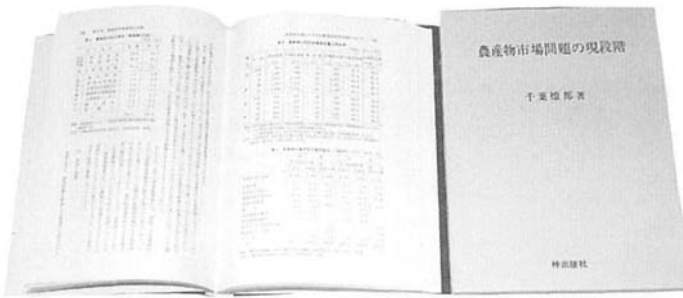
①農産物市場政策の機能と形態、②農産物価格制度の現状と問題点 補論 小生産者市場―その展開と特質―などの論述である。

いま、なぜ、アメリカは日本にコメの輸入自由化をを迫るのか？ガット・ウルグアイ・ラウンドの焦点であるコメの輸入自由化問題は、わが国農産物市場問題の基本構造を理論的・歴史的に説明するとともに、外庄・内庄のもとで進む日本農業の危機の現状をも分析して、その打開、克服の展望におよぶ。現代日本の経済社会を理解するための必読書として講読を勧めたい。

このほど梓出版社からA5版・三〇〇頁・定価三、三〇〇円で発

刊された。講読希望の方は、一般の書店で求められるが、次のとおり取り扱いしている。

千葉燎郎先生著書刊行事業会
振替口座番号小樽九一三二二九九
申込金額 三、三〇〇円送料不要
(北海学園大生協より送付)



お知らせ

会報の購読について

会員以外で本誌の継続購読を希望される方は、ご連絡ください。

購読料

年間 二、〇〇〇円（四冊分）

尚、つぎのバックナンバー在庫があります。（一冊五〇〇円送料込み）

第2号「都市生活者からみた農業」

―都市生活者の農業に対する意識は、どうなっているのか―

第3号「農村における生活環境と

景観」―緑豊かな田園景観と生活環境について考える―

第4号「女性から見た農業」

―女性がつくる新しい農村と農業―

第5号「食料の消費と生産を考

える」

第6号「農産物の物流はどう変わるのか」―農産物の物流の現状と展望を考える―



DATA FILE

関連事項 / DATA

拓殖大学北海道短期大学

〒078-01 深川市納内町338

☎01642 (4) 2811

静修短期大学

〒004 札幌市豊平区清田4条1丁目

☎011 (881) 2721

(社)農協共済総合研究所

〒102 東京都千代田区平河町2丁目7番9号

(全共連ビル)

☎03 (3265) 3111

北海道立中央農業試験場 企画情報室

〒069-13 夕張郡長沼町東6線北15号

☎01237 (2) 4220

プレスオールタナティブ

〒153 東京都目黒区三田2-7-10

セントラル目黒

☎03 (3791) 2147

名寄市教育委員会

〒096 名寄市大通南1丁目

☎01654 (3) 2111

北海道大学教育学部

〒060 札幌市北区北11条西7丁目

☎011 (716) 2111

研究叢書の頒布

第7号「農業と環境保全―農業と環境保全のかかりについて考える―」

第8号「農民参加の地域づくり」
―東北農業から学ぶ地域振興―

地域農業研究叢書NO・4

「旧開・高生産力地帯における個別営農展開の軌跡と地域農業振興の課題」―栗山町農業振興計画策定に関する基礎調査―

地域農業研究叢書NO・5

「野菜産地形成と生産・生活複合化農業の可能性」―厚沢部町農業振興計画策定に関する基礎調査報告書―

地域農業研究叢書NO・6

「道央耕種地帯における地域農業情報システムの役割と可能性」

―栗山町農業情報システムに関する基礎調査研究報告書―

地域農業研究叢書NO・7

「北海道における農協の規模・事業展開方式に関する調査研究」

―平成3年度北海道委託研究報告書概要―

地域農業研究叢書NO・8
「北海道における農地利用と流動化のあり方」―北海道農業協同組合中央会委託事業―

地域農業研究叢書NO・9

「留萌農業の地域構造と展開方向」―留萌地域農業総合コンサルタント報告書―

地域農業研究叢書NO・11

「旧開稲作地帯における野菜振興の課題」

―前田農協農業振興計画策定に関する基礎調査報告書―

編集後記

今年の冬は例年になく雪が多かった。どんなに冬が長く厳しかろうと必ず春は来る。本誌がお手元に届く頃には桜の花も咲き始めているはずだ。

バブル崩壊以降の景気低迷からいつ抜け出すのだろうかと思いつつ、新聞を眺める毎日だった。しかし、ここへ来て一部の経済指標は景気回復のきざしを示しはじめているようだ。経済情勢にも必ず春は来ると考えるのは楽観的に過ぎるだろうか。札幌の街を歩くとガラ空きの貸しビルが目につく。都会では街の姿が経済の動きを敏感に反映するが、農村ではそれが隠れている。隠れているから後からじわじわバブル崩壊の影響が出てくるのだろうか。

本号では、高齢者と農業を特集した。なかなか書いて頂ける方がみつからず、結局三人の方にお願ひできた。このテーマについては、これからも取り上げて行きたいと思う。(M・N)